



経営責任者として、大戦景気時には鈴木商店を三井・三菱・住友などの財閥をしのぐ企業にまで成長させた金子直吉（右）と、大戦景気を利用して一介の会社員から船成金になった内田信也（左）。大戦景気後の二人の命運は大きくわかれた

どんな人たちが成金になったのか？

第一次世界大戦に伴う特需によって新しい輸出関連の企業が次々と勃興し、かなりさまざまな商売をしても巨利を稼げるようになった。代表的な新興企業が鈴木商店だ。

もともと鈴木商店は、政府と提携して台湾の樟脳や砂糖を独占的に扱うことで業績を伸ばしてきた商社だったが、第一次世界大戦中に業務を拡大した。

その戦略は、内外の物資の買い占めであり、鉄を筆頭に米、小麦、大豆、銅などを大量に買いあさっては、それを企業に売って巨額の利益を得たのである。さらに会社買収、新会社創設などをして、電力・鉱業・鉄道・繊維・海運など多角的な経営を展開していった。このため傘下の企業は六五社にのぼり、従業員数二万五〇〇〇人という一大総合商社に発展したのだ。

鈴木商店の経営責任者である金子直吉は、「三井・三菱を圧倒するか、あるいは二社と並んで天下を三分するのが、鈴木商店の理想だ」と豪語した。事実、大戦景気の時期、貿易では最大手の三井物産をしのぐ取引高を示している。

有名な成金が生まれたのは、船に関する分野が顕著であった。戦争によって世界的な船舶不足が発生し、船はつくればつくっただけ売れ、船の運賃やチャーター料も天井知らずに高騰した。この恩恵を受けて、日本の造船業や海運業は空前の利益を上げ、世界第三位の海運国になった。

この分野で成功した人々は船成金と呼ばれた。代表的な人物に、内田信也、山下亀三郎、勝田銀次郎などがある。

たとえば内田信也は、三井物産船舶部の社員だったが、大戦で船舶不足の兆しが見えると、退社して内田汽船会社を設立。たった一隻の中古汽船を借り受けて操業を開始すると、その汽船を他社に又貸しして差益を上げた。